

平成30年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立岐阜聾学校

学校番号	102
------	-----

自己評価

学校教育目標	<p>聴覚に障がいのある幼児児童生徒一人一人の可能性を最大限に伸ばし、自立と社会参加ができるよう、「生きる力」を育む。</p> <p>○コミュニケーション能力を身に付け、主体的に学び、判断・行動し、問題を解決できる力を育成する。</p> <p>○健やかな体と自他を尊重する豊かな心を育成する。</p>
--------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

評価する領域・分野	専門性の向上と授業力向上
現状及びアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・「コア・スクールを核とした専門性向上システム構築事業」校に指名された機会を利用して、「職員の専門性の一層の向上」を目指している。 ・今年度より「自分の思いをもち、他者と積極的にかかわることのできる幼児児童生徒の育成～自立活動の内容を踏まえた指導・支援を通して～」をテーマとした研究に取り組みはじめた。 ・保護者を対象としたアンケートでは、質問項目「専門的知識が豊かで資質を身に付けている」では、「あてはまる」：79% (H29 83%、H28 74%)、「あてはまらない」：12% (同 11%、14%)であった。また、授業に関する質問項目で「教育に熱心に取り組んでいる」(93%)、「授業内容・進度が実態に即している」(87%)、「一人一人の実態にあった教材・教具が準備されている」(82%)と授業に関しては、肯定的な回答が9割近くであった。しかし、職員の専門性についてはこの3年間を比較しても8割を境界に推移しているのが現状である。 ・通常の教育課程に準ずる教育を受けている幼児児童生徒の保護者は、聴覚障がいに対する合理的配慮の基、基礎学力の定着を期待している。また、英語の学習に強い関心があり、2020年改定の新学習指導要領にある小学校の外国語活動・外国語の内容について、一貫した系統的な英語教育を進めていく必要がある。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員の聴覚障がい教育に関する専門性の向上を図る。 ・言語学習の充実を図り、幼児児童生徒の言語力を向上させる。 ・授業において、教科の専門性を向上させ、聴覚障がいの支援を踏まえた授業の在り方を考える。 ・準ずる教育において、新学習指導要領への対応を行う。
重点目標を達成するための校内組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・研修部（全校研究） ・コア・ティーチャー養成研修事業
目標の達成に必要な具体的取組	<ul style="list-style-type: none"> ・コア・ティーチャー養成研修事業による県外の学校の視察や参加した研修会の報告を校内研修の位置付けで行う。 ・言語に関する検査（J.COSS 日本語理解テスト・読書力診断テスト等）を実施し言語に関する客観的データを活用する。 ・一人一課題研究授業を実践し、授業力の向上を図る。また、教員同士の授業参観月間を設定する。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	<ul style="list-style-type: none"> ・研修会等をとおして、専門性の向上を図り、それらを教育活動に生かす。 ・言語に関する検査の結果を、個々の幼児児童生徒の指導・支援に生かす。
取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> ・研究期間を5年とし、成果や課題を長期的な視点で検証できるようにした。基本グループは学部単位とするが、小中高の一貫した学力向上の取組を行うため教科研究の日を設定した。 ・聴覚障がいを有する子どもへの授業に対し「指導方法・教材・教具等で工夫をしていること」「教科・領域の専門性を向上するために取り組んでいること」等を専門性向上アンケートとして各職員に答えてもらい、他の教員がどのような取組を行っているかを知る一助とした。 ・コア・ティーチャー及びコア・ティーチャー養成研修者が視察した学校の状況報告や、参加した研修会の報告を「コア・ティーチャー通信」として全職

	<p>員に配付し情報の共有を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> 言語に関する検査として、幼稚部で絵画語彙テスト、小学部で絵画語彙テスト、読書力診断テスト及び J. COSS 日本語理解テスト、中学部で抽象語理解力検査と基礎学力テストを実施した。
評価の視点	評価
① 各種校内研修や「コア・ティーチャー通信」、自主研修会で得られた情報により、聴覚障がいに対する理解を深め、各々の教育活動に生かすことができたか。	(A) B C D
②客観的な言語に関する検査結果や他の職員の取組を、それぞれの授業に生かすことができたか。	A (B) C D
③一人一課題研究授業や授業参観、専門性向上のアンケートを通して、個々の授業力アップを図ることができたか。	A (B) C D
④各種研修を通して、新学習指導要領への対応ができたか。	A (B) C D
成果・課題	総合評価
<p>○校内研修のグループごとのテーマとコア・ティーチャー養成研修者の研究テーマを関連付けることで、学部全体での取組ができた。さらに、学部ごとに幼児児童生徒の発達段階や個々の実態に応じて言葉の獲得について、適切且つ、継続的に指導支援を行った。保護者の理解も得ることができ協力態勢ができた。</p> <p>○専門性向上アンケートを実施したことで、聴覚障がい有する子どもたちへの配慮を再確認することができた。また、専門性を向上させるための個々の取組を知ることができた。</p> <p>▲自立活動の指導に対する不安がある職員が多くおり、幼小中高と一貫した自立活動の取組内容に対する理解が十分でないことが課題である。</p> <p>▲専門性向上のための取組を行っていることが、保護者に理解されていない。</p>	A (B) C D
来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> 今年度は、全校研究の内容に「自立活動の内容を踏まえた指導・支援」を位置付け、聴覚障がいに対する学習上の支援の在り方を明確にし、職員が共通の概念を有することができるように取り組んだ。次年度は、それを基に実践を積み上げ、その効果を検証するとともに情報の共有化を進める。 専門性向上に向けた学校の取組を、学校通信などで保護者に伝える。

学校関係者評価 (平成31年2月19日実施)

意見・要望・評価
<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒は、物怖じすることなく、発言できるなど、非常によい姿がみられる。生き生きと学習しており、児童生徒の様子から、先生方の苦労や努力が分かってうれしい。 英語の学習では、同じ発音でも意味が違い、カタカナで読み方の表記を工夫することで、目で確かめることができるように指導いただいている。 視覚的教材を豊富に活用した授業展開が見られる。プロジェクターで絵(画像や教科書)を映している。今後も、プロジェクター等の機器を活用して、視覚教材の充実をお願いしたい。 人間関係を積極的に構築するとともに、基礎学力の定着をめざし、早期から、文の読み取り等により言葉を増やしている。いろいろな教科の学習を大切にしてほしい。 教室は戸棚が多いが、固定されていないものについては、順次固定を進めていく必要がある。 子供が楽しくのびのびと生活している。このような雰囲気を継続していけるとよい。 防災教育について充実しているのは素晴らしいことだと思う。参考までに他の小学校で、「命を守る訓練」の実施計画を、学校の職員ではなく消防署が立て、職員の動きをチェックした実践がる。第三者的視点が入ると新たな発見もあるそうなので参考にさせていただけるとよい。